

マス・サバービア考 (VI)

— 中学・高校のテキスト (地理的分野) に見る郊外 —

西 脇 和 彦

Investigations into Mass Suburbia (VI)
Suburbia Described in Recent Authorized Junior and Senior High School
Geography Textbooks

Kazuhiko Nishiwaki

Abstract

By looking at nine kinds of updated authorized junior and senior high school geography textbooks, this paper attempts to trace the changing view of “mass suburbia” in modern Japan.

In the first stage of modernity roughly from the 1950s through the 1970s the booming Japanese economy gave rise to “mass suburbia.” Today the phenomenon continues, and in the 1980s we have entered a new stage of modernity.

The author confirmed that the textbooks contain descriptions of the characteristics of mass suburbia in this second stage of modernity such as the aging of “new towns,” restructuring of mass suburbia, and conurbation. The author believes that the “glocal” observation of quantitative and qualitative changes of Japanese mass suburbia can be a key to understanding our society in the near future.

Key words: *mass suburbia* (マス・サバービア), *aging of new towns* (ニュータウンのオールドタウン化), *conurbation* (連接都市), *authorized textbooks* (検定教科書)

1. はじめに

高度経済成長がもたらしたマス・サバービアは、その誕生から半世紀を経た現在も、その存在を強く主張している。しかし、都市内部の再開発や郊外地域の利便性格差により、新たな様相も見せ始めている。たとえば、前者ではピンポイントでの人口増加、後者では郊外都市の自立や近隣都市との連動である。わざわざ都心まで通勤しなくとも、郊外の地元駅周辺でショッピングが済んでしまう。近代化の所産である郊外化も、単なる都市部の拡大による周辺農村部へのスプロールの侵攻段階から、次のステップへと移行しつつある。近代をファースト・ステージとセカンド・ステージに区分する現代社会学の視点にならうと、サバービアも遅まきながらセカンド・ステージに突入したことになる。サービス化社会と情報社会のもと、より利便性の高いサバービアが求められている。サバービアもいわゆるモノ造り中心の段階から脱却し、少子高齢社会にも適応した高付加価値が付与されたサバービアへと質的転換がはかられ、その成否が如実に格差として現れだした。やはり、サバービアは近未来の姿をポジティブにもネガティブにも映し出す最良の指標といえるのである。

筆者はこれまでマス・サバービアの諸側面を「郊外生活論」「マス・サバービア考Ⅰ～Ⅴ」(『学苑』1997.9, 1998.12～2011.11)において追究してきた。時代性、空間性をもとに、その事例もとりあげたが、その事例の1つ、長野市の郊外化を「マス・サバービア考Ⅳ」(2002.12)で報告したことがある。同市の郊外化は、『新編 詳解地理B』(二宮書店,平成26年1月 初版第2刷発行)でも「身近な地域の調査—長野市を例に」と題して、冬季オリンピック(1998)を追い風とした郊外化の進展と、衰退しつつある中心市街地の再活性化をはかる『門前都市「ながの」』プロジェクトの2側面から紹介されている(同書, pp.26-28)。旧市街地から5キロメートルほど離れた田園地帯にオリンピックの主会場(スピードスケート・フィギュアスケート)が新設されたが、それらは高速道路のインターチェンジからは交通至便の場所にあり、会場間を結ぶアクセス道路も最短距離で整然と敷設された。そのロードサイドの発展は、ビジネスから見ても郊外住宅地としても顕著である。流通面でも住宅開発面でも目を見張るものがある。また、冬季オリンピックのアルペンスキー競技の舞台となった志賀高原では、競技場へのアクセスは格段に向上し、周辺の温泉地や観光地は恩恵に浴している。しかし、その半面、恩恵に浴することができなかつた近隣の温泉地もある。ここにも格差社会の事例を見ることができる。郊外化の光と影、旧市街地の空洞化対策など、現在進行形のリアリティに富む内容があり、研究の醍醐味は教科書資料からも実感できるのである。

本稿では、最新の中学・高校検定教科書を資料とし、そこに時代変容を反映した現代サバービアの諸側面を見出すことを目的とするが、その前に、2000年以降のサバービアに関連したエピソードを2件紹介する。

2. 最新のサバービア・エピソード

1) 業務核都市(ツインシティ)としての町田市と相模原市

ツインシティは、単に都心部へ通勤通学する居住者が多いベッドタウンという初期的イメージから脱却し始めているのではないだろうか。隣接する周辺地域への通勤者も多く、JRや私鉄駅周辺に集積する商業施設は都心部のそれと比べて遜色がない。若者のなかには、「買い物も地元で充分、わざわざ時間をかけて都心まで行かなくても」と考える者が少なからずいる。渋谷に行ったことのない地元高校生さえいるほどである。

町田市のホームページによると、都区部への通勤は就業者の3割という。隣接の相模原市や横浜市へ働きに行く市民が増加中で、都内間移動者よりも、他県との移動者が増加している。町田・南町田・鶴川・多摩境などのターミナル周辺部への居住者が増加中で、明らかに交通至便地域への人気が高く、駅から離れた徒歩圏外の団地、バスや自動車を利用する団地は敬遠されがちとなっている。

人口が急増する相模原市、超高速のリニアモーターカーの停車予定駅でもある同市も、事情は町田市と同様である。JRと私鉄のターミナル駅橋本を中心としたアクセス至便地域への人口移動が顕著である。圏央道やリニアの開通は必然的に人やものの流通を変容させ、首都圏西部の中心核都市として一層発展することが予想される。町田・相模原、それに厚木も加わり接続都市(コナベーション、後述)としてつながる可能性がある。すなわち、ツインシティあるいはトリプルシティの誕生である。さらに北部に位置する八王子市ともいずれ接続するかもしれない。これら郊外都市は圏央道のライン上に位置しているのである。

郊外へ移転した大学も例外ではない。ターミナルに直結した大学はまだしも、駅からスクールバス

を利用する大学となると、少子高齢社会では苦戦を免れない。同一大学でも郊外校は、人気でも偏差値でも都心校に引けをとることになる。そこで、都心部の校舎をリニューアルし、コンパクト型の大学に生まれ変わらせるか、遠郊よりは近郊に近づけるか、あるいはサテライトオフィスを設置し一部でも利便性を確保するか、思案のしどころとなっている。少子化と生涯教育の時代は、お客様である受験生優位の時代である。

2) 田園都市の輸出

東急電鉄はベトナムのホーチミン市郊外で、大プロジェクトのベッドタウン的郊外都市を建設中である。10年以上の長期計画で、交通網や宅地の開発を並行かつ総合的に行うという（テレビ東京、未来世紀ジパング「ベトナムで“日本流”が沸騰！」2013.5.13, 朝日新聞, 2012.10.4）。国内では飽和状態にあるマスの郊外住宅地も、もとはといえば高度成長後半期からの展開であった。すなわち、台頭する中産階級を見込めるベトナムであればこそこのプロジェクトである。この中間層をターゲットとする街づくり戦略は、総合的なパッケージ型インフラ整備ともいわれ、東急グループが培ってきた田園都市開発のノウハウを海外で展開する絶好の機会といえるのである。

鉄道を中心にその沿線開発を進める総合開発は日本のお家芸である。住宅に関わるインフラや不動産・交通・教育・生活・観光娯楽・医療福祉・情報通信等。この嚆矢となった小林一三の阪急宝塚戦略から東急多摩田園都市構想、そしてサバービア・田園都市のベトナム・バージョンへと、それぞれに地域ブランドが醸しだされる。ベトナム・バージョンは、ルーツから100年後のグローバル化時代のパイロット事例となるかもしれない。グローバル化時代の温故知新にふさわしい好事例である。本来、サバービアの展開は、ヨーロッパ、アメリカ、日本、アジアへとグローバルな展開をしてきたことに改めて気づくのである。

また、田園都市線のキーステーション二子玉川に、楽天が2015年本社を移転する。そこは半世紀前まで郊外地域であったが、再開発により完全に都市化し、現在では人気スポットになっている。さらに、東急田園都市線と並行する国道246号線の地下には大容量の光ファイバーケーブルが埋設されているという。情報産業は必ずしも都市中心部に立地する必要はない。「21世紀は国道246号線の方角にある」とかつて言われたことを想起したが、こうした内外の壮大な実験の行方は、今後の日本を暗示するかのようである。

3. 中学校のテキストに見る郊外（地理）

平成23年3月に検定済の出版社4社のテキストから、「郊外」に関連したキーワードを表1にまとめた。郊外住宅地・ニュータウン、工業団地、近郊農業、ロードサイドビジネス、海外のサバービアといった、オーソドックスな「郊外」特性が見られるが、同時にそこには現在の問題点や課題も見出すことができる。

1) 郊外住宅地・ニュータウン

その一例を東京書籍『新しい社会 地理』から引用する。同じ関西でも新旧のニュータウンが比較され、新しい動向や課題が述べられる。

表1 テキストに見る郊外（中学校／地理） テキストはすべて平成23年3月検定済 平成25年1～2月発行

郊外 テキスト	住宅地・団地 ニュータウン	ロードサイド ビジネス	産業・学術	新都心	外国の サバールピア	その他
新しい社会 地理 721 東京書籍	千里 NT 泉北 NT ポートアイランド	SC アウトレットモ ール	工業団地 近郊農業 地産地消 生産者販売所 つくば研究学園都市	都心回帰現象 幕張新都心 さいたま新都心	ダーチャ	私鉄沿線 インターチェンジ 付近
中学社会 地理 722 教育出版	千里・香里・洛西・ 西神・泉北・平城・ 相楽の各 NT 多摩・港北・千葉 海浜・千葉の各 NT	SC 流通センター	工業団地 近郊農業 つくば研究学園都市 関西文化学術研究都市	幕張新都心 さいたま新都心 みなとみらい	工業団地（バンコク） スモーカー・パレー シリコンバレー	インターチェンジ 周辺 林間田園都市
中学生の地理 723 帝国書院	八王子南大沢 NT 千里・泉北・西神 の各 NT	大型 SC アウトレットモ ール	工業団地 近郊農業 つくば研究学園都市	幕張新都心 さいたま新都心		
中学社会 地理的分野 724 日本文教出版	郊外住宅地 桃花台 NT 関西大都市圏 東京大都市圏	SC	近郊農業 関西文化学術研究都市		シリコンバレー	衛星都市

NT…ニュータウン SC…ショッピングセンター

神戸市は、1970年代から丘陵地を切り開き、ニュータウンの建設を始めました。都市の中心部とニュータウンを地下鉄で結び、通勤・通学客を運ぶようにするとともに、丘陵をけずって得られた土は、沿岸の埋め立てに利用されました。この埋め立てによって誕生したのが、ポートアイランドです。そこには大型船が接岸できる埠頭やマンション、商業施設が整備され、海上のニュータウンとなりました。

1960年代から70年代にかけての経済成長を背景にして、近畿地方の各地では大規模な開発が行われました。都市の中心部の過密を解消するために建設された千里、泉北のニュータウンは、その代表例です。これらのニュータウンがつくられて30年以上が経過した現在、住民の高齢化が新たな課題となっています。そのため、今日では高齢者に向けた医療や介護のサービスの充実を図るとともに、若い世帯の新しい住民をニュータウンに増やすために、緑地の整備や子育て支援、新しい住宅の建設などにも力を入れています。（東京書籍『新しい社会 地理』p.188）

このようなニュータウンの新旧比較や現状と課題は、教育出版『中学社会 地理 地域にまなぶ』にも見ることができる。

1970年代には、住み心地のよい住宅を大量に供給するため、東京近郊の台地・丘陵地にニュータウンの建設が進められました。多摩、千葉海浜、千葉、港北などのニュータウンでは大規模な開発が行われ、多くの森林や農地が住宅地に変わりました。

郊外の開発が進められた結果、東京への通勤圏は周りの各県にまで広がり、現在では都心からおおよそ70kmの範囲にまで及んでいます。（教育出版『中学社会 地理 地域にまなぶ』p.212）

1971年から入居が始まった多摩ニュータウンは、多摩市、八王子市、稲城市、町田市にまたがる大規模なニュータウンで、約20万人が住んでいます。建設されてから40年近くが経ち、住宅が古くなるとともに住民の高齢化も進み、しだいに「オールドタウン」化してきています。また、住宅は核家族用に造られているため二世帯が利用しにくいなどの理由から、人々が出て行き若い世代も少なくなっています。（同書、p.213）

都心から50キロメートル以上離れた郊外を「遠郊」（遠い郊外）ないし新郊外という。首都圏では地価の高騰からバブル期以降に顕在化した。連日の通勤には疲労感や負担感が強いが、田園的環境に恵まれ、子育てや定年後には最適といわれる。エンジョイライフを実現する一策ではある。

これを週末や休暇中に実現する一例が、ロシアのダーチャ（後述）にほかならない。

また、時の経過とともにニュータウンは団地っ子のふるさともなったが、同時に「オールドタウン化」したことも事実である。そこでオールドタウンの再生化策として、リノベーションが謳われている。エレベーターのないアパートに、エレベーター塔を後付で設置したり、従来の2世帯分の部屋を新たに1世帯分の部屋に改造し再生させたりする。また、上階をメゾネット化し部屋数を増やすといった世帯数の減築化が試行されている。いずれも従来のリフォームを超えたりリノベーションで、環境に配慮した再生（Re-）策といえる。これまでのスクラップアンドビルドに対するアンチテーゼとして、現行の成熟期に適合したリサイクル型のコンパクトな方策が模索されている。

日本文教出版の『中学社会 地理的分野』では愛知県小牧市の桃花台ニュータウンと奈良市西部の学園前地区の紹介が印象に残った。奈良市は観光地のイメージが強いが、大阪府のサバービアであることを再認識した。

また前者は、名古屋と犬山の間位置する大規模な郊外住宅地であるが、名称の通り、以前は果樹栽培の盛んな近郊農村地帯であった。開発されて半世紀近くなるが、名鉄小牧とニュータウンを結ぶ新交通システムのピーチライナーは、名古屋市中心部への接続が悪く、乗客数が伸びないことから赤字経営となり、ついに2006年廃線となった。現在はバス輸送に切り替わっている。同テキスト（pp.276-291）の「身近な地域を調べてみよう 愛知県小牧市を例に」には、同市にある桃花台ニュータウンが戸建やマンション群からなる広大なニュータウンで、4つのブロック・学区から構成され、ニュータウン東側の半地下一画を中央高速が貫いていること、小学校が4校、中学校が3校もあること、ニュータウン中央の桃花台センターにはショッピングセンターや広場があることが記されている。筆者は2003年に桃花台ニュータウンを見学した際、大勢の人を見かけたが、確かにピーチライナーの乗客は少なく車内は閑散としていた。ピーチライナーは乗降口が進行方向の右側だけにあり、左側はすべて座席になっていた。どの駅も1つのホームに上下線が向き合うパターンであった。小牧から終点の桃花台東まで乗車し、電車のUターンを確認した。（写真1～6参照）

小牧市の桃花台ニュータウンと廃止されたピーチライナー（2003.3筆者撮影）



写真1 戸建地区



写真2 マンション地区



写真3 桃花台センター駅周辺



写真4 桃花台センター駅構内



写真5 ライナーの車内（乗降口上部）

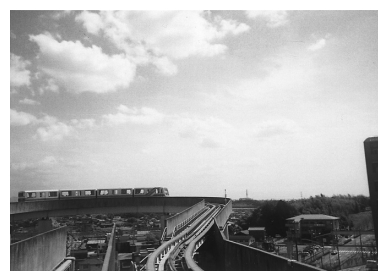


写真6 Uターンするライナー（右回り）

関西大都市圏のなかにも、新郊外をイメージさせるものやオールドタウン化（別名「郊外病」）を指摘する記載がある。

関西大都市圏は、三重県伊賀地方や滋賀県、兵庫県播磨地方にまで広がっています。政令指定都市の堺市をはじめ、大津市・宇治市・東大阪市・姫路市・奈良市・和歌山市などの都市や、たくさんの衛星都市があり、郊外にはニュータウンが分布しています。（日本文教出版『中学社会 地理的分野』p. 239）

近年、JR が輸送の改善を進め、私鉄との乗客獲得競争がはげしくなっています。（同書、p. 240）

奈良市西部の学園前地区を例に、現在のようすをみてみましょう。開発の古い地区では住宅や団地の建てかえが始まっています。広い駐車場をそなえた大規模商業施設が増え、小売店のなかには閉店するところも出てきました。代わって、住民の高齢化や住宅の建てかえ・修理が必要な時期になったため、住宅リフォーム店や病院などが増えています。（同書、p. 241）

郊外に住むサバービア住民を大阪市内や関西学園都市に通勤するため、JR 西日本をはじめ関西の私鉄は鎬を削っている。関西では JR と私鉄が並行し比較的近隣を走ることもあり、顧客獲得のためスピードアップや乗り換えの便利さ、それに乗り心地の快適さでサービス競争が激化している。107 名が亡くなった JR 福知山線脱線事故（2005 年 4 月）も、こうした人口の郊外化と密接に関わっている。単なる電車運転士のスピードオーバーだけに起因する事故ではない。郊外化がその牙をむいたサバービアの悲劇であった。

2) 新都心群と都心回帰現象

さらに資料として用いた検定教科書で顕著なことは、さいたま新都心、幕張新都心、神奈川の横浜みなとみらい 21 のような「新都心」についての記載である。1980 年代に「新宿副都心」という表現があったが、いずれ「新都心」という表現も定着し、その新鮮味を喪失することになるのであろう。違和感や新鮮味を甘受しなくなった時こそ、日常的に定着した時なのである。テキストは次のように述べる。

東京にさまざまな機能が集中し過ぎたため、都心から 20~40 km の位置にある千葉市、さいたま市、横浜市などの都市にオフィスや商業などの都心の機能の一部を移転し、東京だけに人や物が集中しないようにする計画が 1980 年代に進められました。その結果、「幕張新都心」や「さいたま新都心」、「みなとみらい」地区などの開発が行われ、多くのオフィスビルが新しく建設されています。（教育出版『中学社会 地理 地域にまなぶ』p. 213）

最近では、横浜市・千葉市・さいたま市などに、東京の機能を分担するかたちで、オフィス街が広がっています。しかし、これらの都市は衛星都市の性格の方が強くなっています。（日本文教出版『中学社会 地理的分野』p. 213）

米国ミネソタ州のミネアポリスとセントポール両市は、地理的に隣接するだけでなく、ビジネスや文化においても融合し、ツインシティーズと呼ばれている。同様に、これら首都圏の新都心群も、周辺の都市を巻き込んでツインあるいはトリプル化し、1つの文化圏を形成していくであろう。もはや都心に服従するだけの郊外都市ではなく、21 世紀の業務核都市となるに相違ない。この現象は、新郊外ほど都心から遠隔地ではなく、従来の衛星都市の位置にはあるが、時代適合的な変容を示している。衛星都市もステップアップし、その周辺を巻き込んで再編成の時代を迎えたのである。テキストはこの事情を次のように説明している。

1990年代に地価が下がると、都市再開発が進み、再び郊外よりも都心に近い地域の人口が増加するようになっていきます（都心回帰現象）。

現在、東京湾岸にはたくさん的高層マンションが建設され、人口増加のために学校が不足するなどの問題も起きています。（東京書籍『新しい社会 地理』p.142）

東京湾岸地域の再開発による高層マンションの増加によりピンポイントで人口が増加中である。それにより保育園や小学校の不足が叫ばれているが、これは30年前の高島平団地と同様のパターンという指摘がある（朝日新聞、2014.8.8）。となると、歴史は繰り返すことになるのであろうか。サバールピアにも二極化が生じたように、長期のスパンで考えると、近郊にも勝ち組、負け組がいずれ生まれるであろう。しかし現段階では、いつどこでどのような現れ方をするか、まだわからない。

3) ショッピングセンター（モール）

新都心に関連して、ビジネスの新潮流を指摘することができる。たとえば、千葉県に誕生したショッピングセンター（モール）の紹介である。従来、首都圏の周辺東部への関心は低く、都下西部ないしは城南方面が人気のスポットであったが、湾岸臨海地区の開発や高速道路網の整備により、東関東自動車道や館山自動車道沿いにビッグビジネスの動きが見られる。現に、ある食品製造・販売会社は、2010年以降、首都圏郊外地域のなかでも、千葉県への出店に力を入れ、成田・酒々井・幕張新都心・木更津のモールやアウトレットに出店を続けている。少子高齢社会では、国内消費の縮小が危惧される。リピーターや外国人観光客の確保を考えるしかなく、至極当然の対応策である。

東京大都市圏のまわりの変化

関東地方では、鉄道だけでなく高速道路も東京を中心に放射状にのびています。高速道路で中心部と結びついた、東京大都市圏のまわりの地域では、近年、高級品を安く売るアウトレットモールや巨大なショッピングセンターがいくつも誕生しています。中心部と比べて安い土地代で広い用地を確保できるので、売り場や駐車場も広大で、休日には自動車で東京方面からも買い物客がやってきます。（帝国書院『社会科 中学生の地理』p.227）

最近では、映画館などのレジャー施設や美術館などの文化施設が併設されたショッピングセンターが増えてきています。買い物をするための場所だけではなく、娯楽のための場所にもなりつつあります。（日本文教出版『中学社会 地理的分野』p.86）

首都圏の郊外ではこれまでのところ、東方、千葉・茨城方面はやや印象が薄かったが、今回の検定教科書ではその記載事項が増加した。事実、モールの新設が著しく、外国からの観光客、特にイスラム教徒用に、ハラール食品の提供や礼拝堂の用意をする観光施設もある。グローバル時代の郊外は、文化的多様性を許容する必要がある、その先駆的事例を千葉方面の郊外が提示している。

また、ショッピングセンター（モール）は、買い物に限らず、時間や空間を楽しむところでもある。フードコートやシネコン（シネマコンプレックス）の充実はもちろんのこと、4F（fun, fantastic, fashionable, futuristic）の価値を内包するサービスが必要不可欠である。モノを扱いながらも、モノ離れを促進する矛盾した装置でもある。常に楽しさを付加し提供し続けなければ、消費者・利用者は見向きもなくなる。ショッピングセンターは、1 stop shopping & services の futuristic モデルを提示している。楽しくなければ、気分がよくなければ、ショッピングセンター（モール）ではないのである。

4) 工業団地

流通の利便性から、高速道路のインターチェンジ付近には工業団地や商業団地、近郊野菜の生産地が展開している。従来のテキストにもこれらは登場するが、交通網の発達に伴い、より遠隔地化している。また、空港近接の工業団地も存在する。

各地で交通網が整備されて、空港や高速道路のインターチェンジ付近に工業団地の開発が行われ、工業の地方分散が進んだためです。(東京書籍『新しい社会 地理』p. 151)

埼玉県や群馬、栃木、茨城の北関東3県には、各地に工業団地が見られ、ここで生産された製品の多くは、国道などを利用して東京大都市圏や東京湾岸の貿易港に輸送されます。2011年に北関東自動車道が開通したことから、建設が進む常陸那珂港(茨城港の常陸那珂港区)を活用することにより、北関東から貿易港への輸送がおおはばに改善されます。(同書, p. 206)

東北地方では、冬には積雪によって農業ができないため、かつては、関東地方などへ出かせぎに行く人がたくさんいました。そこで東北地方の県や市町村では、地元の人の働き場所として工業団地をつくり、そこに工場を誘致しました。1970年代から1980年代にかけて、東北自動車道や東北新幹線などが開通すると、関東地方と短時間で行き来ができるようになりました。このことによって、電気機械などをつくる工場が、広い用地と労働力を求めて、高速道路の周辺にある工業団地を中心に、進出してくるようになりました。1990年代以降には、近代的で規模が大きい自動車工場や、その部品をつくる工場も進出してきました。(帝国書院『社会科 中学生の地理』p. 241)

交通の発達は、日本各地でさまざまな地域の変化をもたらしました。例えば、各地の高速道路のインターチェンジ周辺には、工業団地や流通センターなどが造られています。これは、原材料や工業製品などの商品を消費地や市場などへ、より短時間で効率的に運ぶための立地です。また、郊外の幹線道路に沿って進出した、大型のショッピングセンターがにぎわいをみせるようになりました。(教育出版『中学社会 地理 地域にまなぶ』p. 151)

1970年代以降、関越自動車道や東北自動車道などの高速道路の整備により、トラック輸送の便がよくなった北関東地域にも、地価が安く広い土地を確保できたため自動車・電気機器など多くの工場が進出しました。高速道路のインターチェンジ近くには工業団地が造られ、東京などから移転した工場の立地もみられました。(同書, p. 215)

東北地方の高速道路沿いに、自動車・電気機器・IC関連・機械などの工場が誘致され、工場団地が形成されているとの指摘があった。これに関連した実話であるが、筆者宅のトイレ修理を住宅建材メーカーに依頼したことがある。数日で修復可能とのことであったが、結局1ヵ月近くかかってしまった。それは、丁度この時東日本大震災が発生し、東北にある工場の生産と流通が停止したためであった。自動車部品の供給が停止し、海外工場での生産が停止したニュースからはロックダウン輸出を理解し、身近な部品が東北の工場で製造されていた筆者宅のトイレの修復からは、さらに体験的に理解を深めることができた。工業団地の誘致についても、そこに思念された意味をより深く汲み取り、理解しなければならない。

5) 近郊農業

中学校社会(地理)のテキスト最終項目は、都市近郊に展開する近郊農業である。近郊といっても遠近さまざまな立地があるが、たとえ遠隔地であっても近年交通網の発達により、その利便性が高まっている。まずは、その説明文を引用する。

奈良や兵庫、京都などの大都市郊外では、生花や葉ものを中心とした野菜を栽培し、出荷日の朝に収穫し

て市場へ出す近郊農業がさかんです。産地の名前をつけた伝統野菜である九条ねぎや賀茂なすは、京野菜として高い価格で取り引きされています。(東京書籍『新しい社会 地理』p. 183)

埼玉、千葉、茨城などの各県では、大消費地に近い条件を生かして、都市向けに野菜を出荷する近郊農業が行われています。(同書, p. 203)

千葉県や茨城県、群馬県は、多くの野菜の生産量で全国の上位となっています。また、消費地に近い条件を生かし、生乳やにわたりのたまごなどを生産する畜産もさかんです。

市街地の拡大や保冷ができるトラックの普及などによって、野菜や畜産のさかんな地域は近郊から周辺部へと拡大しています。(同書, pp. 206-207)

消費地に近い地域で、野菜の生産や畜産を行う農業を近郊農業といいます。輸送費が安く、短時間で新鮮な農産物を消費地に届けられるのが利点です。

茨城県のはくさいやピーマン、千葉県のねぎやほうれんそうなどは、全国有数の生産量をあげています。(帝国書院『社会科 中学生の地理』p. 230)

近郊農業による生産品目例として、京野菜で有名な九条ねぎの紹介があった。この九条ねぎは、収穫したままで出荷する場合と、みじん切り風にカットしてから出荷する場合がある。後者の場合、さらに用途別にカット幅まで細かい配慮がなされている。そこまで利用者の便宜を図ってサービスを提供する時代である。まさに、サービス化社会における6次産業(1+2+3=6)化のモデルとして好事例である。時間的にも空間的にも、広い視野が必要なのであり、この視点なくして、深い理解は不可能である。多様性が前提にあるサービス化社会、グローバル化社会での必然というべきである。

また、近郊農家のなかには、自宅前や道路沿いで農産物の直売をするケースがある。現金収入になること、購入者と直接会話ができること、リピーターがつくこと、といったメリットを筆者は聞いたことがある。これらは有人直売所での話であるが、無人直売所もあり、番犬がいたり監視カメラ付のところもある。インターホンが設置されていることさえある。野菜や鶏卵の自動販売機も存在するが、中身が見える小型のコインロッカーと形容すればよいだろうか。いずれにしても、有人でも無人でも、小銭が必要ではある。

以上、中学校の社会科テキスト(地理)から、サバービアの特徴5項目を抽出整理し、最新のサバービア・トレンドを確認した。日本を知ることが中学校の主要テーマではあるが、国際化のなかで、外国のサバービアについての記載も若干増加している。以下、高等学校の社会科テキスト(地理)を考察する。

4. 高等学校のテキストに見る郊外(地理)

2012年と13年に検定済となった高校地理のテキスト5冊を原資料とするが、ここでも、新動向に関する記載を認めることができる(表2を参照)。ニュータウンのオールドタウン化(郊外病)やその再生化、郊外都市の接続化(コナベーション)がそれである。時代の変容を反映した内容が盛り込まれ刺激的でさえある。

1) ニュータウンの「オールドタウン化」(郊外病)とその再生

昭和30年代から全国各地に造成された郊外型団地は、アパートにせよ戸建住宅にせよ、築半世紀を迎え、建て替えか再生かの岐路に立たされている。少子高齢社会は、郊外団地にもその姿を先鋭的に現し、時代の寵児から一転問題児へと転化したのである。建物としても居住者としても、である。

表2 テキストに見る郊外（高等学校／地理） テキストはすべて平成26年1～2月発行

テキスト	郊外	サバービア (日本)	サバービア (外国)	ショッピング センター	産業・学術	スプロール 現象	その他・ アンチ郊外
地理 A 東京書籍 東書地 A 301 平成 24 年 3 月検定済		千里 NT 高蔵寺 NT 多摩 NT	ダーチャ（露，別 荘） シリコンバレー	大規模な SC 郊外型ショッピ ングモール		○	コンパクトシティ 都心回帰 再都市化 NT のオールドタウ ン化と再生
高等学校 現代地理 A 最新版 清水書院 清水地 A 302 平成 24 年 3 月検定済		コナベーション (接続都市)	ダーチャ（家庭菜 園付別荘） シリコンバレー エッジシティ	ジャンクション， インターチェンジ 付近		○ ドーナツ化現象	つくばエクスプレス (八潮・流山・柏) 都心回帰 次世代型路面電車シ ステム (LRT)
新詳地理 B 帝国書院 帝国地 B 301 平成 24 年 3 月検定済		平城・相楽 NT 千里 NT 多摩 NT	ダーチャ（菜園付 別荘） 大ロンドン計画 シリコンバレー	インターチェンジ 付近 アウトレットモー ル	近郊農業・ 園芸農業 工業団地	○ ドーナツ化現象	衛星都市 副都心 新都心 ビジネスセンター 田園都市構想 長野市の郊外化
新編 詳解地理 B 二宮書店 二宮地 B 302 平成 24 年 3 月検定済		郊外住宅地 多摩 NT 千里 NT 接続都市（コナベ ーション）	大ロンドン計画 サイエンスシティ (シリコンバレー)	インターチェンジ 付近	近郊農業・ 園芸農業	○	衛星都市 ベッドタ ウン エスニックセンター 長野市の郊外化 近郊電車 (LRT)
地理 B 東京書籍 東書地 B 303 平成 25 年 3 月検定済		千里 NT 多摩 NT	ダーチャ シリコンバレー シリコンプレーン ルート 128	大型ショッピング モール テーマパーク 大規模駐車場完備 (米)	筑波研究学 園都市 関西文化学 術研究都市 近郊農業	○	衛星都市 住宅都市 グリーンベルト 都心回帰 再都市化 コンパクト化 コンパクトシティ 在宅勤務 SOHO NT のオールドタウ ン化と再生

○…簡単な記載あり NT…ニュータウン SC…ショッピングセンター

それへの対応は喫緊の課題である。先ずはその事情を引用する。ただし、テキストに「郊外病」という表記は登場しない。「郊外病」は筆者が知る限りマスコミの造語である（例えば、『朝日新聞 ウィークリー AERA』, 2006. 11. 6, p. 19 には、「郊外病」の 3 大疾病として、高齢化・地価下落・税収不足が指摘されている）。

高度経済成長期の住宅難解消のために、大阪・千里，名古屋・高蔵寺，東京・多摩をはじめとする丘陵地でニュータウン開発が行われた。大規模住宅地の開発方式を定めた新住市街地開発法の対象となるニュータウンだけでも，全国 49 か所にのぼる。当初，ニュータウンでは住民の世代交代と住宅の建て替えが進むと想定されていたが，実際には施設の老朽化や住民の高齢化などの「オールドタウン化」が問題となっている。

地元自治体は，さまざまなニュータウン再生事業に取り組んでいる。こうした取り組みは，新規開発から既存住宅地の再生へ転換することを意味している。（東京書籍『地理 A』 p. 186）

高度経済成長期の比較的早い時期に開発・建設された大阪府の千里ニュータウンや東京都の多摩ニュータウンなどでは，居住者の高齢化が一気に進んだが，近年は建物や傾斜地のバリアフリー化，老人福祉施設の建設などが進められている。（帝国書院『新詳地理 B』 p. 190）

ニュータウンのオールドタウン化

1970 年代に郊外に建てられた住宅団地（ニュータウン）において，居住者の高齢化が問題となっている。大半の団地で，高齢者人口割合が 20% を超え，1967 年に建設された北須磨団地では 30% 以上となっている。こうした状況を指して，「ニュータウンのオールドタウン化」という言葉が生まれた。（東京書籍『地理 B』 p. 34）

郊外の住宅団地において、建物自体のハード面においても、居住者自身のソフト面においても、高齢化への対応が模索されている。リフォームを超えたりノベーションや、ネットワークづくり（見守り隊・人的交流）がそれである。パーソナル化が吹き荒れる時代のなかで、ノーマライゼーションを推し進めなければならない。背反する動向を止揚しなければならない現代である。そして、この時代に登場した新動向が、コナベーション（接続都市）である。

2) コナベーション（接続都市）の誕生

郊外化の拡大深化により近接する都市同士がつながりを深める状態を示した社会学のタームであるが、それほどには親和性がない。しかし、事象として進行中であり、それを説明する有効な概念である。これにより、利便性が高まり、お互いの弱点をカバーすることさえできる。郊外化の第2ステージに適合したキーワードといえる。

市街地の拡大によって隣接する二つ以上の都市が連続して一つの都市域をつくる都市群を、接続都市（コナベーション）という。ドイツのルール地域や日本の京浜地域などがある。（二宮書店『新編 詳解地理 B』p. 155）

EU の中心地域では、有力な都市が互いに近接して都市機能を分担したり、市街地が連続して接続都市（コナベーション）をつくったりすることが多い。（同書、p. 254）

テキストに登場する近接都市は、別名業務核都市の概念に近似している。中心部に対する周辺部、郊外の位置にありながら、もはや、副次的存在ではなく、近隣都市を包摂した独自の社会的文化的存在となっている。中心部に対する引け目は見当たらない。首都圏で例えると、湾岸エリアの幕張新都心、上信越・東北の分岐点でもあるさいたま新都心、それに、東京西部の町田・相模原地区が相当する。都心部再開発と一部の回帰現象、また、業務核都市の成長、これら異なるベクトルと磁場が存在する第2ステージの郊外化である。ワンパターンでは括ることのできない複雑な現実がある。

ちなみに、コナベーション（conurbation）については次のような社会学的説明がある。

今日では産業と宅地化の進展によって、いくつかの都市が融合して形成される都市地域、ないしは異なった核をもった二つ以上の近接した都市が市街化の連結によってつくられる地域をさす。（中略）多くは大都市と隣接する衛星都市群との間で進行している。執筆者：秋元律郎（有斐閣『新社会学辞典』p. 470）

3) ショッピングセンター（モール）の大型化

ショッピングセンターに関する記載は2000年以降のテキストにも登場しているが、今回では、その大型化が強調されている。ショッピングセンターでも栄枯盛衰が激しく、中規模程度では生き残りがむずかしい。強みがより明確なもの、顧客のニーズを先取りしたもの、そして何よりアミューズメント性が付加されたものでないと消費者の支持は得られない。扱う商品の品質以上に、高度な付加価値が必要となっている。ビジネスの世界も第2ステージに突入したのである。買い物だけの空間ではなく、サービスから時間の消費も含む満足をショッピングセンターは提供し続けなければならない。

今日、郊外のビジネスセンターや工業団地は多様な企業活動の場となっており、同じく郊外の大型ショッピングセンターは、消費や人々の交流の中心となっている。そのため、郊外の住宅地に住む中産階層の人々にとって、都心部との結びつきは弱まっている。（帝国書院『新詳地理 B』p. 293）

消費者は、ショッピングセンターでさまざまな品目を一度に購入することができる。また、レストラン・

喫茶店、セルフサービス形式のフードコート（飲食のための屋内広場）なども整備されており、多くは全国にチェーン展開されている店舗である。（二宮書店『新編 詳解地理B』p. 133）

大都市近郊では、大型のショッピングセンターが高速道路の出入り口付近や、幹線道路沿いに次々と立地した。アメリカのショッピングセンターは、計画的につくられた小売店の集合体で、広い敷地の70～80%を駐車場にあてている。中核となる店舗には、全国的に立地展開している大手のデパートやスーパーマーケットが進出し、数十kmも離れた地域の人々が集まってくる。日本でも同様なショッピングセンターが大都市郊外などに立地している。現在では、ネットショッピング、通信販売のオフィスや倉庫・配送センターが、必ずしも都市内部でなく、地価や交通条件の有利なところに立地している。（東京書籍『地理B』p. 155）

わが国では高度成長期に展開したスーパーマーケットは、郊外化の波に乗り、さらにショッピングセンターとして成長した。1 stop shoppingの利便性に、さらには1 stop servicesの付加価値も上乘せして、である。医療、理容美容マッサージ、トラベル、教育、写真スタジオ、クリーニングのサービスはもはや当たり前となった。インターチェンジ付近には、商品保管倉庫、通販の流通基地もある。まだテキストには掲載されていないが、モートル（自動車利用のビジネスパーソンや家族旅行者が宿泊施設として利用するホテル）やクリニック・タウン（数種類の診療科と薬局を合築した駐車場付医療機関）もある。旧市街地や大都市中心部へ行く必要性が薄れたのである。この外向きの方向には、近郊園芸農業への関心がある。以下、この自然回帰的現象を考察する。

4) 近郊農業とダーチャ

都市近郊の農村地帯が住宅地化し郊外化することを論じたのが都鄙連続論である。郊外の外側には田園地帯が広がり、農家が都市で消費する農産物を生産するだけでなく、都市生活者が自ら田畑を借りて栽培することもある。前者の場合、生産者の顔が見え信頼できる農産物として販売される（実際に生産者の顔写真が売り場に示される）。また後者は、家庭菜園の拡大版でもあり、定年後のライフスタイルにしばしば組み込まれる。しかし、予想外に農産物の栽培はむずかしく、経験者でないと実を結ばないことが多いのであるが、これについては触れられない。とにかく、大量生産・大量輸送へのアンチテーゼとして、高校のテキストに「地産地消の促進」や「農産物直売所」が掲載されるようになったことが真新しい（ただし、これは地理Bのテキストには掲載されているが、地理Aのテキストには見当たらない）。ここにも、時代のトレンドを確認することができる。

ところで、近郊農業それ自体は次のように説明される。

園芸農業は、野菜や果物、花卉などを都市へ出荷するため、主として都市周辺で集約的な栽培を行う農業であり、北西ヨーロッパや北アメリカ、日本などの大都市周辺で近郊農業として発展している。（二宮書店『新編 詳解地理B』p. 88）

かつて立松和平（1947-2010）は「春雷の風景」（『春雷』著者ノート、河出書房新社、1990）で都市近郊農村が都市に侵食されていく様子を「農村が都市の論理に支配されている」（p. 267）と評したが、「6次産業化」「地産地消」「農産物販売所」が実践される今日の状況を、彼ならばどのように理解したであろうか。ささやかな抵抗、あるいは構造再構築の一助と見るのであろうか。筆者は機会あるごとに農産物販売所で花卉を購入し、同日中にスーパーからも同じ花卉を購入する。これは、両者の日持ちを比較するためである。価格は1/2～1/3で日持ちは3倍、圧倒的に農産物販売所の勝ちである。つやのよさや吸水性がまったく違う。産地直送も第2ステージを迎えたのである。

晴耕雨読的な環境こそ遠郊にふさわしい。日本では新郊外と称するが、あまり知られていない概念である。しかし、ロシアにはダーチャという適合的なタームがある。このタームは以前の高校テキストでも散見されたが、今回のテキストでは1冊（二宮書店『新編 詳解地理B』）を除き、ダーチャの写真も掲載されている。そのなかの2冊から引用する。

ロシアの人々の多くは、都市ではアパートに、地方では一軒家に住んでいるが、いずれもそれほど大きくはない。都市の約半分の世帯が簡素な木造の別荘（「ダーチャ」）をもち、週末などをここで過ごす。その菜園での農作業は休日の楽しみであるとともに、その収穫物は不足しがちな野菜や果実（ジャムや漬物として保存食にする）の供給源として、人々の生活を支えている。（東京書籍『地理A』p.102）

モスクワに住む人びとの半数くらいが、ダーチャとよばれる家庭菜園のついた別荘を郊外に所有するといわれる。（清水書院『高等学校 現代地理A 最新版』p.77）

ダーチャは遠郊にある週末別荘で、自給自足的生活を享受する。庭ではネギ・キュウリ・ジャガイモ・ラディッシュなどを栽培する（NHK Eテレ、テレビでロシア語「郊外の別荘 ダーチャの休日」2012.8.16）。今日、食料自給率が39%（カロリーベース）の日本としては、新郊外を含む家庭菜園、ベランダ菜園、地産地消、店産店消などにより、ポストモダン的、第2ステージ的な可能性を模索することも意味がある。第2ステージの性格特性、自己再帰性が究極の自己快復をはかるとき、それが自然回帰となるのは必然かもしれない。

5. おわりに

本稿では、郊外化の新しい動向が、中学・高校の最新版の検定教科書（地理的分野）にどのように記載されているのか、近代の第2ステージの特徴であるマス・サバービアの質的変容が見出せるのか、これらをモチーフに考察した。第2ステージは、後期近代、リキッド・モダンともいわれるが、その特徴は郊外化現象にも反映する。そして必然的に、サバービアにも多様性やバリエーションを産出することになる。この時代の特徴としてサービス化や情報化が指摘できるが、これらは多様化の促進剤として作用し、第1ステージの定義を相対化し、ソフト化するものとなるだろう。この小論でも、いくつかの定理、定義に対するアンチテーゼを示せたのではないかと思う。ニュータウンのオールドタウン化とその再生・新都心とコナベーションの形成・ショッピングセンター（モール）の大型化、これらはマス・サバービアの質的変容を示している。第2ステージの事例にほかならない。マス・サバービアも量的段階から質的段階へとシフトしたが、その指摘を検定教科書の記載事項に確認することができた。改めて社会は有機体であり、学校テキストも一級の資料であることが認識できた。

現代社会では社会規範が多様化し、弛緩し、弱体化している。しかも状況変化が速い。そのために自己が判断基準となりがちで、それゆえ自己再帰的近代ともいわれる。このパーソナル化も第2ステージの特徴ではあるが、しかし、視点が自己中心的なミクロだけに偏るのではなく、ミクロからマクロへと結節するグローバルなものでなければならない。

参考資料

（中学テキスト）

五味文彦・戸波江二・矢ヶ崎典隆ほか『新しい社会 地理』東京書籍、2013年2月発行

竹内裕一・笹山晴生・中村達也ほか『中学社会 地理 地域にまなぶ』教育出版、2013年1月発行

中村和郎・谷内達ほか『社会科 中学生の地理 世界のすがたと日本の国土』帝国書院, 2013年1月発行
金田章裕ほか『中学社会 地理的分野』日本文教出版, 2013年2月発行

(高校テキスト)

金田章裕ほか『地理 A』東京書籍, 2014年2月発行
竹内裕一ほか『高等学校 現代地理 A 最新版』清水書院, 2014年2月再版発行
片平博文ほか『新詳地理 B』帝国書院, 2014年1月発行
山本正三ほか『新編 詳解地理 B』二宮書店, 2014年1月第2刷発行
金田章裕ほか『地理 B』東京書籍, 2014年2月発行

(その他)

森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣, 1993年2月発行
立松和平『春雷』河出書房新社, 1990年5月再版発行
『朝日新聞 ウィークリー AERA』2006. 11. 6付
相模原市企画市民局企画部広域行政課さがみはら都市みらい研究所・町田市政策経営部企画政策課編『地図でみる相模原市・町田市のすがた～広域連携を検討・推進するための基礎データ～』相模原市・町田市, 2011年3月発行
朝日新聞「田園都市輸出します」2012. 10. 4付
都市づくり部建物住宅対策課編『町田市団地再生基本方針』町田市, 2013年3月発行
朝日新聞「東京そこにある古い 大団地 30年後の湾岸映す」2014. 8. 8付
<http://www.kotokyoto.co.jp/kujonegi/kujonegi-top.html> (農業生産法人 こと京都株式会社)
<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/miraidukurikenkyujo/> (2013年度研究報告, 町田市未来づくり研究所 副所長石坂泰弘「町田市の現状分析」2014. 4. 21)
http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/012.html (農林水産省)
NHK E テレ「郊外の別荘 ダーチャの休日」『テレビでロシア語』2012. 8. 16
テレビ東京「ベトナムで“日本流”が沸騰!」『未来世紀ジパング』2013. 5. 13
NHK テレビ「団地! 団地! レボリューション 2号棟平成編大集合! 団地はアートだ!」『探検バクモン』2013. 7. 31
テレビ東京「激突! 巨大ショッピングモール」『ガイアの夜明け』2013. 12. 22
テレビ東京「古いものに新たな魅力を」『ガイアの夜明け』2014. 3. 18
NHK テレビ「農業改革待ったなし 成長産業への模索」『クローズアップ現代』2014. 7. 17

(にしわき かずひこ 総合教育センター教授・近代文化研究所所員教授)